

カトリック センター便り

第6号
平成25年
4月23日

新教皇の願い

教会が、最も貧しい人々や
力のない人々に寄り添うこと

新教皇フランシスコは、枢機卿時代から、運転者付きの高級車よりも公共交通機関を使うことで知られていましたが、教皇になってからも、教皇職の盛装をやめたり、住むところも普通の宿所にしたりと特権を捨てて自ら貧しく生きようとする姿勢を示しています。

最後の晩餐の記念ミサで行われる洗足式では、今までの教皇は、十二人の司祭の足を洗っていましたが、新教皇は、少年院に赴いて十二人の受刑者の足を洗いその足にキスをしました。

三月十九日、聖ヨゼフの祭日には聖ペトロ大聖

堂で就任ミ

サを行いま

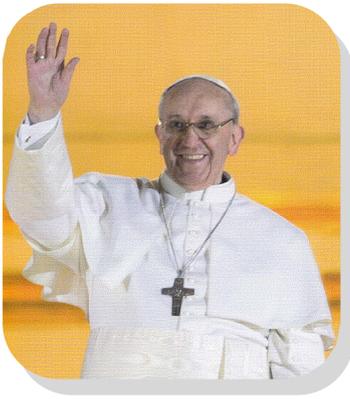
したが、その

前に広場に

集まった

人々の中を

ジープで巡



新教皇フランシスコ
2013.3.13選出される

アシジの聖フランシスコってどんな人？

この度、新教皇が名乗ったフランシスコという元の聖人はどんな人だったのでしょうか。

イタリア中部のアシジに1182(or1181)年豪商の家に生まれた。若いころ享樂的な生活を送っていたが回心し、それからは、貧しく生きたキリストと同じ生き方をしようと、この世のあらゆる富・名声を捨てて、山中の岩の裂け目や洞窟で寝泊まりし、肉体労働や托鉢で糧を得て祈りの生活を送った。その生き方に共鳴し、所有物をすべて放棄した同志が仲間として加わり、「小さき兄弟団」と名乗ったこの集団は大きくなり修道会となる。長野にあるフランシスコ会もこの後継であり、本学のフランシスコ館もこの聖人の名前である。

り、親しげにあいさつし祝福を与えました。その時、重い障害のある人を見つけると自らジープを降りて近づきキスをしました。ことばだけでなく行動によっても弱い立場に立たされている人々を尊重し、共に生きようとする心が伝わってきます。

今月のみことば

主は羊飼ひ、わたしには
何も欠けることがない。

(詩編23:1)



学内探訪 名画をたずねて

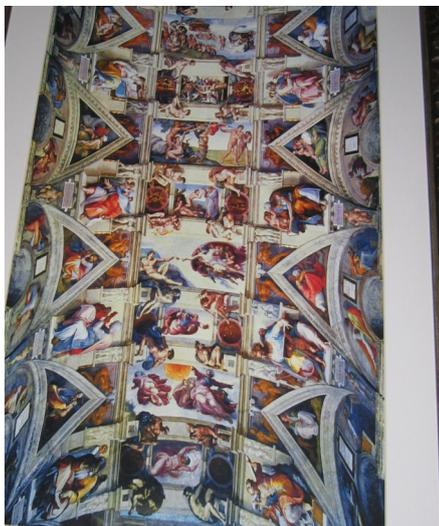


システイナ礼拝堂天井画

ミケランジェロ

今年の二月末前教皇が辞任し、三月十二日から次期教皇を選出する会議・コンクラーベがこのシステイナ礼拝堂で行われた。1477年から1480

年にかけてバチカン宮殿内に建てられたこの礼拝堂には、前号でピエタ像の作者として紹介した同じミケランジェロの作である天井画がある。1508年から1512年にかけて作られたこの天井画は、盛期ルネサンスを代表する芸術作品の一つである。天井の中央列には、『創世記』からとった九つの場面があり、中でも著名な「アダムの創造」の中の、父なる神の指とアダムの指とが触れ合おうとする場面は、特に有名である。



2階の事務室から昇降口に向かう廊下の突き当りの壁に掛かっている。

カトリックと私 (4)

―なぜ、いま、自分はここにいるか―

学長 吉川 武彦

駒ヶ根病院から下総療養所へ転勤

東京の北区田端町の家では整理箆筍ひとつではじめた生活だったが、子どもが増えるに従って幾分荷物は多くなった。だがこれからも転々とすることを予測していたので、できるだけ家具を増やさないことにしていたばかりか、転居の時に荷造りが簡単にすむようにと、段ボールを横にして押し入れに積み上げる整理方法を工夫した。そのお陰で田端から駒ヶ根の家への転居は軽トラック1台ですんだ。荷造りは段ボールをそのままたむだけだしサークルベッドはボルトを外してたたむだけだったからである。駒ヶ根での生活も同じようにしていたので千葉への転居もやはり軽トラック1台だった。

駒ヶ根病院の院長、石田武先生から「人は、誘われたときには異動すべきだ」というお言葉をいただいたので、加藤正明先生のお誘いに乗って国立精神衛生研究所、通称では「精研」、いまの国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所に移ることにした。ただ心残りだったのはせっかく入れていただいた聖マルチン幼稚園とのお別れだった。2人の子どもたちがお世話になった幼稚園にご挨拶に伺い、事情をご説明した上でお礼を述べたとき、園長先生は「それは残念ですが、ここでお子さ

またちに伝えたことはずっともちつづけてくださると思います。期間としては僅かでしたが、でもお子さま方はのびのびとしていましたし、明るいお子さまたちでした。お別れは悲しいですが、いつまでもここでの生活を忘れないでいてください」といわれた。

ところが、私の転勤が決まったにもかかわらず家内は「もうしばらく、ここ、駒ヶ根にいたい」と言い出した。やむを得ずまた幼稚園に顔を出して「もうしばらくお世話になりたい」というと、園長先生はまさに破顔一笑、「どうぞ、どうぞ。気が済むまでいてください」といつて下さった。園長先生のこれらのお言葉は忘れたいものであり、そのお言葉をいただいたことをお伝えしたくて、先日、聖マルチン幼稚園に伺ったのであった。

もちろんこの園長先生はおいでにならなかったが、このお言葉に勇気づけられて子育てに励んだ結果、駒ヶ根で育った4人の子ども、なかでも聖マルチン幼稚園に通った2人の子どもたちは生き生きと育ったこと、そしてこの駒ヶ根のことを忘れていないこと、なかでもこの幼稚園のことは忘れがたいといっていることを報告した。同席して下さった先生方はその話をお聞き下さったばかりか「おそらくその当時の園長先生やご担当の先生方はお喜びになるでしょう、としみじみと話された。

駒ヶ根に来るときも「先乗り」して私が単身赴任したように、千葉にも先乗り単身赴任することになった。子どもたちが通える幼稚園探しからしなければならなかったからである。思いがけないことが起こるもので、精研からのお誘いで異動するこ

とになったはずだが、研究所には正式なポストがないのでしばらくの間、国立下総療養所に勤務するように命じられたのである。ちよつとびつくりはしたがそれはそれでいいチャンスとばかりに療養所勤務体験を楽しんだ。この下総療養所はうつそうとした森の中にある精神療養所で、旧陸軍の精神療養所としては国立武蔵療養所があったが、この国立下総療養所は海軍の精神療養所である。

その頃、医者の世界は学閥で塗り固められていたので、武蔵療養所は東大系、下総療養所は慶応系の医者が占めていた。私自身は千葉大学なので学閥から遙か離れた位置にいたが、おもしろいことに、のちに私は国立武蔵療養所にも勤務することになる。じつに「縁は異なるもの、味なもの」である。国の方針として私を預かることになった下総療養所は、とんだお荷物を預けられたという気持ちではなかったかと思う。ときの総長豊泉太郎先生にご挨拶に伺ったがご機嫌は斜めであった。

それでもさすがに慶応ボーイ、雑談に移ると「ところで、家族は？」とのご下問があった。そこで「子ども4人の・・・」と言い始めたら、先生は、すぐ脇に控えていた事務局長を振り返り「この方の宿舎はどうなっている？」と質問された。官舎の割り当ても格によって違いがあるようで、もそもそと事務局長が答えると「それじゃ、この方の家族は大変だ。あの家が空いているだろう。あれにしなさい」と命じられた。あとからわかったのだが、先に予定されていたのは「判任官」官舎で、実際にはいることになったのは「勅任官」官舎ということだった。この官舎はもう何年も住む人がいなかったせい

か荒れてはいたが、8畳、6畳、4畳半に2畳の女中部屋があるという大きな家、ただトイレの床は腐っていて斜めになっていたり玄關のガラス戸の開閉がたびししたりだった。石炭風呂で木の小判型、半間の台所に流しが着いていた。庭付きなので広々としていた。

「聖母マリア幼稚園」でいただいたものは大きい

ねぐらが決まったので職員にお聞きすると、すぐ近所に幼稚園があると教えていただいた。早速幼稚園に行くとそこはなんと、カトリック幼稚園ではないか。びっくりして園長先生に面会を申し込んだ。「じつは」と切り出し、「というわけでこのたびお隣の療養所に赴任してくることになりましたが、子どもは現在カトリックの幼稚園に通園中であり、是非ともこの幼稚園に入園させていただけないか」と申し入れた。年度途中なので入園をお許しただけどうかと不安だったが、園長先生は「どうぞ、どうぞ」といつて下さった。

この年の11月、ようやく腰を上げた家内と子どもたちが駒ヶ根から千葉市に転居してきた。その間、部屋の掃除やら庭木の剪定やら、あちこちの補修なども自分でやり、家族を迎える準備もした。家内は子どもたちが通うのがカトリック幼稚園であることと子どもの足で歩いて5、6分ほどのところだということに満足、こ機嫌だった。この「聖母マリア幼稚園」で得たものは大きい。長女は言葉の発達もごくごく普通であったが長男は言葉の発達が悪く、自分の思いを言葉に直すことが下手だった。それだけに何かにつけて行動で自分の

意志を示そうと思う子であった。ときには手が先に出てしまうこともある。言葉による交流がへたくそなためひとり遊びが多い。どんなものでも遊び道具にしてしまうところがあつた。

ごくごく普通にいえば、クラスでの集団行動がとれない子なので先生方からは「問題児」されてもいい子である。それをしない幼稚園であつた。お迎えに私が行くときには必ず担当の保育士さんが「ああ、のり君のおとうさん。よくおいで下さいました。今日はね・・・」と話しかけて下さる。そのなかで「のり君は、本当に面白いお子さんなんですよ。きょうは私たちもとても勉強になりました」などと話しはじめ「のり君は棒一本を使っている遊びをして見せてくれるんです。いまだきのお子さんは、遊び道具がないと遊べない子が多いのですが、のり君は違うんです。お父さんが教えたんですか」などと目を輝かせていうのであつた。少々気恥ずかしい気持ちにもなるが、保育士さんとのこうした会話を通じ、幼稚園での子どもの様子が手に取るようにわかつた。

この幼稚園と療養所との間にゴルフ場があつた。

幼稚園の後ろは広々としたフェアウェイ、幼稚園から出てすぐのところにはバンカーがある。ゴルフ場は月曜日はお休み。のんびりしたもので、ゴルフ場もこの日は幼稚園の子どもたちがフェアウェイを飛び回つても文句を言わない。それだけでなく、バンカーはまさに子どもたちの天国、広いひろいお砂場であつた。秋になれば落ち葉は舞い、春には桜が満開になる。私は細工物が大好き、なかでも竹細工はお手の物。療養所に無尽蔵に生えている竹を切



つてきてしばらく寝かせ、その竹で弓をつくり、竹とんぼをつくって見せたりもした。幼稚園へ「出張」するばかりでなく、やや大きな子もいる官舎からは、その子らもわが家に遊びに来ては一緒に竹細工に

熱中した。

この「聖母マリア幼稚園」には本学の卒業生がおられると最近お聞きした。まだその方とは直接面識を得てはいないが、私の子どもたちにも与えたインパクトの大きさを是非ともお伝えしたいものである。まだその当時は、神父さまもおられたように思う。ひよつとすると園長先生は神父さまだったのかも知れない。背の高い神父さまであつた。したがって、はじめてこの幼稚園に伺ったとき応対して下さったのは園長先生ではなかったのかも知れないがともかくも神父さまとときどき言葉を交わすことができた。

私の周囲にいるカトリック信者の方々

いま、私は本学にいますので周囲にはカトリック信者の方がたくさんおられるが、その方々のことについて述べるわけではない。それは先にお断りしておく。カトリックでは「信徒」といわれるようだがここは私なりの言葉で言わせていただくことにする。

私の周りにはカトリック信者でもっとも近いのはもちろん家内である。もうこの春で50年付き

合っている。家内がどのような経過でカトリックに入信したかを聞いたことはないが、先にも触れたように内山神父さまの影響が大きかったことは確かのようなのである。内山神父さまはなにかのご縁で東京薬科大学に出入りされていたようで、そのご縁で家内もカトリックの友人がかなりいる。

そのお一人が壮絶な病いをへて天に旅立たれた。私ももちろんご葬儀に伺ったし幾たびもお墓にお参りに行った。野原のような広い墓地に、小さな墓石が立っていた。家内はそのお墓の脇に立ち「ねえ、ようちん。どうしてる。もうあんなに苦しまなくてよくなった」と語りかけていた。この“ようちん”、もう亡くなられて20年以上になるが、いまでもときどきわが家の話題に登場する。「ようちんは、修道院に入りたがっていたけど、とうとうその思いを残して逝ってしまった」というように。生前にはたった一度しかお会いしたことはなかったが、私の身近にいる信者のお一人である。

身近といえば、家内の従姉妹の石田直子さんがいる。この方のことも先にちよつと触れたが、家内が「なおこちゃん」といつているので私もその謂いで、そのようにいつている。このなおこちゃんは、鎌倉の清泉の出身で、大学が家内と同じ東京薬科大学である。いま逗子で薬局を経営しているばかりばりの薬剤師。でも、信者としては極めてまじめでちゃんと教会に行くようで、その点では家内とは格段の違いがある。カトリック教会ではラテン語で歌うことがあるが、その意味をきちんと知りたいと思っ

てラテン語をものにしたという方である。

はこのなおこちゃんと東京薬科大学の同級生で親しくしておられる。家内はシスター宮澤とは先輩後輩の仲というだけでなくバレーボール仲間。あちこちに遠征するときも一緒だったという。練習で腰が立たなくなつて、体育館の床と一緒に這いずり回ったということでもある。そのシスター宮澤がなおこちゃんに電話してきて、たしか「ラブさんの旦那、精神科医じゃなかったっけ」という話から、私が本学の非常勤としてくることになり、その延長上で学長職をというお話が来た。したがつて直接家内を通してお話が来たのではなく、なおこちゃんが間に入つたことだといふのである。

でもそのなおこちゃん、「私は、武彦さんを推薦したわけじゃないですよ。誤解しないで。私は、じや、直接、電話したら、といっただけ」といつている。このなおこちゃんご夫婦と私たち夫婦は南仏のコートダジュールなどにも出かけたしタイやマレーシアなどにも出かけている。一昨年も昨年も、長野に来て、シスター宮澤と一緒にお食事をしたりしている。

昨年はお二人の信者を見送ることになった。そのお一人が私の弟のつれ合いである耀子さん、60代の最後だったろうか。3人の男の子を残して旅立たれた。逗子の教会で結婚式を挙げ、その教会でご葬儀をした。熱心な信者で、教会の行事にはすべて参加するという方だった。お子さま方はみな結婚しておられたので、安心しての旅立ちであったと思う。ガンだったというが弟からの連絡では「壮絶な最期でした」といつてきた。

もうひとりの方は、昨年末、12月29日にご葬

儀をした太田廣三郎先生である。太田先生は私を精神科医の道に導いた方である。千葉大学医学部を卒業できることになり、1年間のインターン生活をするためにアルバイトに出かけた茨城県の精神科病院で出会った医師、病院長であった。手先が器用であった私は脳外科医になるか心臓外科医になるか決めかねていたが、太田先生に出会つて精神科医になる決心をした。ご葬儀は千葉県の市原教会、浜風の吹き荒れた寒い日だったが、頭のなかには太田先生の思い出で満ちあふれていた。神父さまのお話はよく太田先生を描写しておられたのが印象的だった。

この文章を書いているところに飛び込んできたのが友人のご主人の訃報である。この友人は熱心な信者で毎週きちんと教会に通つておられるがご主人はずばらだったという。彼女が私に「夫、ガン。どうしよう」と青い顔で訴えてきたのが7年前。その彼女を支えてきた7年間であったが、あれだけうろたえた彼女が「今朝、旅立ちました」とたんたんとしたメールを寄越した。ご主人はハンドボールの世界では大変有名な方、その彼が最後までハンドボールにこだわり続けておられた。その姿を見ながら「もうやめて欲しい」といつていた彼女が「これがあるから生きている」といつていた彼女が「彼女が「静かな旅立ちだった」と告げて来て下さつたのである。

(2013年3月14日)

